東日本大震災 復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

2019 年 11 月 23 日から 26 日、教皇フランシスコが訪日。25 日は、教皇フランシスコの「東日本大震災被災者の皆さんに会いたい」というご希望が伝えられ、そのご希望に応えようと、多くの人が協力してきたことが実現した日でした。会場は「ベルサール半蔵門」。この会場については「どうしてここを、もっとよく知られた所であればいいのに」というような質問をよく受けました。これは、前日遅く広島から帰られる教皇様の宿泊先である教皇庁大使館から近く、「被災者との集い」のあと、天皇陛下にお会いになる皇居にも近い所ということで決められたものでした。この会場は、舞台等を設置しても、400 人を収容できる広さがあるということで、被災者と支援者席 300、内外の報道関係者席 100 という連絡を受け、具体的な準備が始まり、当日を迎えたのでした。

当日は、まず、幸田和生司教が、教皇フランシスコの「バチカン市国元首としての教皇の立場、教皇がこの集いを呼びかけられた思い、訪日の意義」などについて話してくださいました。続いて、小野寺洋一神父から、祈りへの招きがあり、会場の雰囲気は終始祈りの雰囲気が漂うものとなりました。

10時に教皇様が入場され、10人の被災者代表と３人の証言者と壇上で挨拶された後、３人の証言を聞かれた教皇から３人への感謝と励ましが語られましたが、このおことばは、集まっているすべての被災者への思いと励ましでもありました。

最後にカトリック東京ボランティアセンター（CTVC）の事務局長・漆原比呂志さんの分かち合いをご紹介いたします。どうぞご覧ください。

教皇様からの贈り物

仙台教区サポートセンター事務局長　小野寺洋一神父

皆様、クリスマスおめでとうございます。

東日本大震災から９度目のクリスマスです。今年の秋は相次ぐ台風が、日本のあちこちに大変な傷跡を残しました。被害に遭われ、今も不自由な暮らしを強いられておられる方々が、一日も早く安心して過ごすことができますように、心からお祈りしています。

今号は、11 月末の教皇フランシスコ来日、特に 11 月 25 日に東京で開かれた「教皇と被災者との集い」の特集です。教皇様は地震、津波、原発事故による三重災害の被災者に会いたいと強く望まれていました。今回はスケジュールの都合上、どうしても被災地に足を延ばしていただくことはかないませんでしたが、東京でその集まりの場をもつことになったのでした。

今回の訪日には「すべてのいのちを守るため」というテーマが掲げられていました。そのテーマに沿うべく、教皇様はたくさんの人々に会うために、短い滞在の間、精力的に飛び回っておられました。広島、長崎、東京、それぞれの場所で、大勢の人々と出会い、直接言葉を交わしていらっしゃいます。今月 83 歳のお誕生日を迎えられた方とは、とても信じられないほどです。時間が許すならば、きっとどの訪問先でも、集まった全員と握手をなさり、声をかけてくださったことでしょう。

教皇様の姿勢から一貫して感じられるのは、「忘れられている人々」へのまなざしです。今回の滞在の間、東日本大震災の被災者、原爆の被爆者、高齢者、若者たち、外国籍の人々…私たちのそばにいる、小さくされている人々に出会い、そして私たちにも、そうした人々へ目を向け、行動することの大切さを伝えてくださっています。「被災者との集い」の場で、教皇様はこのようにおっしゃっています。「愛する兄弟姉妹の皆さん。三重災害後の復興と再建の継続的な仕事においては、多くの手と多くの心を、あたかも一つであるかのように一致させなければなりません。こうして、苦しむ被災者は助けを得て、自分たちが忘れられていないと知るはずです。多くの人が、実際に、確実に、被災者の痛みをともに担っていると、兄弟として助けるために手を差し伸べ続けると知るでしょう。」

誰かが私のことを思ってくれている、私は一人ではないんだ、そう気づいたとき、心に新たな力が生まれてきます。教皇様は希望を贈り物にして届けてくださいました。贈り物を受け取った私たちが、すぐ近くにいる「誰か」とともに、その希望を分かち合うことができますように。

教皇様と東日本大震災被災者との集いで、
祈りをささげた小野寺神父

―教皇フランシスコと東日本大震災被災者との集い―

完全な復興は、必ず果たすことができる

復興と再建には、多くの手と多くの心を、一つであるかのように一致させなければならない

2019 年 11 月 23 日（土）から 26 日（火）まで日本を司牧訪問された教皇フランシスコ（以下、教皇様）は、分刻みの強行スケジュールの中、25 日午前 10 時から約 40 分間、東京都千代田区のベルサール半蔵門で、東日本大震災被災者との集いに参加されました。集いには、岩手県、宮城県、福島県などから被災者や支援者ら 300 人ほどが集まりました。

午前 8 時半の開場を前に、待ちわびる参加者たちは、建物 2 階の会場受付手前から 1 階の入り口まで、列をなして受付開始を待っていました。受付が開始され、持ち物検査等を済ませた参加者たちは、会場内で、懐かしい方との久しぶりの再会を喜んだり、お知り合いの方々と情報交換をしたり、これから教皇様と会うということで緊張の面持ちの登壇者へ頑張って！と声をかけたり、記念撮影をされていました。

大船渡教会をはじめとした参加者の皆さん　　被災者代表として登壇された 10 人

午前 9 時半過ぎ、参加者全員がそろったところで、司会者からの簡単な説明の後、一般社団法人カリタス南相馬代表理事であり、現在、福島県南相馬市のカトリック原町教会で司牧してくださっている東京教区幸田和生司教から、今回の集いと教皇様についてのお話しがありました。

幸田司教は、「この集いの準備に関わってきた者として、僭越(せんえつ)ですが、司教団に代わって皆様にご挨拶させていただきます」と話し始め、最初に、遠路はるばる東京都心へ来てくださった参加者へのお礼がありました。そして、「フランシスコ教皇に、ぜひ被災地に、特に福島に来てくださることを強く願い、福島県南相馬市の野馬追祭場という広大な場所で教皇ミサをささげてもらうことを夢見ていましたが、日程の関係で、被災地に足を運んでいただくことはできないということになり、こうして教皇が被災者を東京に招く形で、会っていただく形となりました」と話されました。

また、今回、証言をする 3 人のうち、1 人が津波被災者、2 人が福島関係、そして被災者代表として登壇される 10 人のうち、半数が福島関係の被災者という点について、「教皇は大地震、大津波とともに原発事故を含めて『三重の災害』とおっしゃっていることから、原発事故のことにやや比重が置かれた人選になっており、岩手、宮城の方には申し訳ない気もしますが、ご理解いただきたいと思います」と述べられました。

次に、集いに参加されている被災者の中には、カトリック信者ではない方もおられるため、ローマ教皇についてと教皇が集いを呼びかけられた思いを説明されましたので、その一部をご紹介します。

「教皇は、バチカン市国という国の国家元首として日本を訪問するという面がなくはありませんが、教皇を理解するために大切なのは、宗教者としての面です。世界最大の宗教団体と言われているカトリック教会の基本的な単位は、それぞれの土地の司教区と言われるもので、日本には 16、全世界には 2,000 以上あるそうです。その司教区のすべての司教は、一つの司教団として繋がっており、その全世界の司教団の一致の要が、ローマ教皇なのです。

今回の集いについてご説明される幸田司教

そういう意味で、教皇は 13 億人のカトリック信者の一致の中心であり、最高の指導者です。それと同時に、全世界の牧者、羊飼いとして、カトリックでないすべての人、特に苦しむ人、貧しい人、周辺に追いやられ、忘れられようとしている人々にたいへん心を砕かれている方です。

フランシスコ教皇は、2017 年 11 月に教皇庁で行われた『核兵器廃絶と包括的軍縮のためのシンポジウム』の席で、次のように話されました。『大量破壊兵器、なかでも核兵器は、偽りの安心感を与えるに過ぎず、人類家族の中での平和的共存の基盤とはなれません。その意味で、被爆者のかたがた、広島と長崎の爆弾で被害を受けた人々、また核実験による犠牲者の証言は貴重です。そのかたがたの預言的訴えが、とりわけ若い世代にとって、警告となるはずです』

今回、教皇は同じ思いで、大地震、大津波、福島第一原発事故という三重の災害にあわれた被災者・被害者と会い、その方々の声を聞きたいとの思いから、この集まりを呼びかけられました。とても短い時間で、本当にわずかしか皆さんの直接の声を聞くことができませんが、この教皇の思いを感じながら、今日の教皇との出会い、そして教皇のメッセージを受け取っていただければと思います。そして、原発について、今回の訪日のテーマに掲げられた『すべてのいのちを守るため』、その観点から教皇が私たちに何を語りかけてくださるのか、一緒に受け止めたいと思います」と話されました。

その後、仙台教区小野寺洋一神父から、「東日本大震災では、多くの方々が、犠牲になりました。そのかけがえのない尊いお一人お一人のことを心に思いを寄せたいと思います。また同時に、東日本大震災では、建物や道路や多くの物が壊されました。目に見えるそれらの物と同じように、それ以上に地域のコミュニティー、家族をはじめ多くの人間の関係も壊されました。それは、今でも続いていると伺っています。震災直後、教皇様は被災を受けたところに訪れたいという希望をもっておられると伺ったことがあります。今回こうして教皇様と被災者の方々との集いがもてましたことを心から感謝申し上げたいと思います。主のもとに召された犠牲になられた多くの方々、そして今もなお大変な状況にありつつも希望のうちに歩んで行くことができますように主なる神様に信頼をよせて、主の祈りをご一緒にささげてまいりたいと思います」という挨拶の後、参加者全員で祈りをささげました。

午前 10 時、会場の前方左手の扉から教皇様が登場されると、参加者は皆、スマートフォンやカメラなどを一斉に向け、一生懸命に教皇様の姿を残そうとしていました。出入り口付近には、車いすの参加者がいましたが、教皇様はその方々と目線が合うように腰をかがめ、励ましてくださいました。

その後、壇上に上がられた教皇様に、菊地功大司教から３人の証言者以外の被災者代表 10 人の登壇者が紹介されました。登壇された方は、岩手県から、山浦玄嗣(はるつぐ)さん（大船渡教会)、菅原マリフェさん（大船渡教会)、宮城県から、シャール・ボルデュック・エメ神父（ケベック外国宣教会※ラシャペール神父遺族として)、佐藤さだ子さん（石巻教会)、福島県から、鈴木キミ子さん（松木町教会)、金澤弘子さん（白河教会)、柳沼千賀子さん（二本松教会)、佐々木愛さん（原町教会)、天尾水樹さん（南相馬市小高区で被災)、吉田和則さん（いわき教会）の 10 人です。

そこでは、大船渡教会の山浦玄嗣さんが手に持っていた手作りの帽子（ズケット）を教皇様がかぶってくださるというハプニングもありました。この帽子は、今後、大船渡教会の宝物として大切に保管されるそうです。

教皇様が着席後、岩手県宮古市のカトリックさゆり幼稚園園長である加藤敏子さん（宮古教会)、福島県南相馬市で被災した小高山同慶寺住職の田中徳雲さん、福島県いわき市から自主避難した鴨下全生(まつき)さんの３人が、順番に証言されました。

加藤さんは、「園長として子どもたちに命の尊さ、自分の命を守る術を伝えていくこと、そして子どもたちの命を守るために最良の選択をしなければいけないことの重さを考え続けている。震災から、人間が自然に対峙することなどできず、自然とともに生きる知恵こそ必要だと学んだ。そして、震災を通して、世界中の多くの人たちが心を寄せ、人と人との繋がりで助け合って生きていく姿に希望を持つことができた。命が一番大切で、失くして良い命などないこと。今、地球上で困難に陥っている小さな人たちの命が守られますようにと祈りながら、生かされている自分に何ができるかを考え、一つ一つ積み重ねていきたい」と話されました。

田中さんは、「原発から北西に約 17 ㎞の地域にあるシンボル的なお寺に住んでいた。農業と漁業が中心の自然豊かなのどかなところで、多くの人々は３世代、４世代が同居して住んでおり、町には 1000 年続くと言われる神事『相馬野馬追』があり、先祖から伝わる歴史と文化を大切にしていた。

受け入れ難い厳しい現実の中で、一時は途方に暮れたが、少しずつではあるが、やがて立ち上がり、この現実を受け止め、歩み始めている。そして便利な時代の恩恵を受けて生活してきたこと、つまり『被害者ではあるが、同時に加害者でもある』ことを自覚し、反省している。原発の問題のみならず、天変地異や異常気象、海洋汚染などの環境問題、そして戦争、難民、食糧、経済格差や心の荒廃等大きな問題を、いかに自分の問題として捉えることができるか。謙虚さを保ち、正しく理解し、反省すべきところは素直に反省すること。そして何より大切だと思うことは、地球の声を聞くこと。私たちは地球の一部、環境の一部。私たちは今、生き方が問われている。成長から、成熟へ。自らが変化の一部になりましょう」と証言されました。

鴨下さんは、「原発事故が起きて、被ばくを逃れるため東京に避難し、慣れぬ地を転々としながら、避難先でいじめにも遭い、死にたいと思うほどつらい日々が続いた。それでも避難できた僕らは、まだ幸せなのだと思う。汚染された大地や森が元通りになるには、僕の寿命の何倍もの歳月が必要。大人たちは、汚染も被ばくも、これから起きる可能性のある被害も、隠さず伝える責任があると思う。

原発は国策。原発を維持したい政府による賠償額や避難区域の線引きによって、被害者の間に分断が生じ、傷ついた人同士が、互いに隣人を憎しみ合うように仕向けられてしまった。僕たちが互いの痛みに気付き、再び隣人を愛せるように。残酷な現実であっても、目をそむけない勇気が与えられるように。力を持つ人たちに、悔い改めの勇気が与えられるように。皆でこの被害を乗り越えていけるように。教皇様、どうか共に祈ってください」と証言されました。

証言を真剣な眼差しでお聞きになった教皇様は、それぞれの証言後、証言者の方へ歩み寄られ、握手を交わしながら言葉をかけられ、記念品を渡されました。証言者の方々は、輝かせた目で教皇様を見つめながら、言葉や記念品を受け取っていました。

その後、３人の証言を受け、教皇様が約 13 分間にわたり、演説され、その中には、「しばらく沈黙の時間を取り、最初のことばとして、１万８千人にも上る亡くなられたかた、ご遺族、いまだ行方の分からないかたのために祈りましょう。わたしたちを一つにし、希望をもって前を見る勇気を与えてくれる祈りをしましょう」と祈りの時間もありました。

教皇様は、地震、津波、原発事故という「三重災害」は、岩手県、宮城県、福島県だけでなく、日本全土と全国民に影響を及ぼし、完全な復興まで先は長いかもしれないが、「助け合い、頼り合うために一致できるこの国(日本)の人々の魂をもってすれば、（完全な復興を）必ず果たすことができます」という力強いメッセージの他、究極的には、全てが互いに絡み合っている世界の問題について、「無関心の文化」がもっとも影響する悪の一つであると指摘した上で、今後の震災復興・再建を含め、未来のために私たちが歩むべき道を指し示してくださいました。

3 人の証言を受け、参加者へ向けて演説された教皇様

演説を終えた教皇様が、被災者代表 10 人と改めて握手と言葉を交わされた後、今回の集いの感謝として、仙台教区平賀徹夫司教から「聖杯」が教皇様へ贈られました。この聖杯は、長年、漆関連の研究・創作を行っている会津若松教会信徒の須藤靖典さんが制作したもので、金属製の杯に漆が塗られ、日本本来の花鳥風月の色彩が蒔絵によって表現されています。

教皇様は、証言者３人へ改めて挨拶された後に降壇され、他の参加者へも言葉をかけ、祝福をささげてくださりながら、退場されました。会場は、教皇様との貴重な時間を思い返して喜びに満ちた参加者たちの顔であふれ、温かな雰囲気の中で集いは終了しました。

教皇様に贈られた聖杯
集い当日は、破損しないよう聖杯を桐箱に入れて、教皇様に手渡されました。
その後、仙台教区で特注した風呂敷に、桐箱を包んでお持ち帰りになられました。

終了後も、興奮冷めやらぬ参加者たちは、感想を話し合ったり、記念写真を撮ったり、記者から取材を受けるなど、思い思いの時間を過ごした後、多くの参加者たちは、午後から行われる東京ドームでのミサへと向かいました。

最後に、今回の教皇様と東日本大震災被災者との集いに際し、情報が発表されてから訪日までの期間が短く、参加者募集に関して、情報が十分に伝わらなかった点がございました。また、集いの開催時間、場所の関係で、ご参加できなかった被災者の方もおられたことと思います。スケジュールの都合上、被災者の皆さまのご希望に添えなかったことが多々あり、大変申し訳ございませんでした。

東北の地で、教皇様と多くの被災者の方々が会う機会を持つことができなかったことは残念ではありますが、教皇様のとてもお忙しいスケジュールの中で、限られた時間、人数ではありましたが、東日本大震災被災者との集いが設けられ、教皇様からの励ましの言葉に勇気づけられ、今後の復興への活力をいただけたことに、心より感謝いたします。この集いに関わられた全ての皆さま、ありがとうございました。

※多くの写真を、カトリック中央協議会からご提供いただきました。
ありがとうございました。

「一致のシンボルとなった日」

ＣＴＶＣ（カトリック東京ボランティアセンター）
事務局長　漆原比呂志

フランシスコ教皇が来日中の 11 月 25 日の午前中は、「被災者との集い」の会場にて、来場者をご案内するボランティアスタッフをさせていただきました。

登壇者の方々をはじめ、東北各地から集まってこられた被災者の方々や支援者の方々との再会は、まるで同窓会のような、大変楽しいひと時でした。

９年近くの間に出会った方々と、辛さも喜びも共に味わってきた時間への、感謝の気持ちでいっぱいでした。

壇上で証言された加藤さん、徳雲さん、鴨下さんのそれぞれの体験、思いと同じように、すべての被災者お一人お一人にも、その人の数だけ異なったストーリーがあり、それが今この瞬間も、そしてこれからもずっと続いていくのだと感じました。それらは決して比較できるものでもなく、それぞれの困難とチャレンジがあることを学んできました。

特に福島においては、避難すべきかどうか、帰還すべきかどうか、「食」をどうとらえるかなど様々な考え方、立場があり、皆さんが苦しみの中で選択を強いられています。コミュニティや家族の中ですら分断があります。

参加者の皆さんが集まり始める前に、記念写真を１枚 ！
左から CTVC 漆原比呂志さん、辻明美さん、仙台教区小野寺洋一神父、大阪教区神田裕神父

今回、被災者として、支援者として、みな考え方や立場が違っていても、教皇のもとに集ったことに大変大きな意味があると思います。たとえ考え方や立場に違いがあっても、それぞれの方の苦しみに共感し、その方の判断や行動を尊重し、関わらせていただくことが大切だと信じて、これまでやってきました。そのことが、「歩むべき道のりとなりますように」という教皇の言葉と結びつき、本当に励まされました。考え方や立場を超えたところで共に向かっていく、「未来のための新たな道」のイメージが、会場の雰囲気から立ち上がってくるように感じました。

もうひとつ、会場案内をしながら感じたことがあります。来場者の方々の中から、被災者の方を前方の席に、支援者の方を後方にご案内していたのですが、なかなか判断が難しい場面がありました。多くの方々は被災者でありながら、支援者でもあります。もしかすると私たちは、（程度や状況は違うとしても）全員被災者であり、全員支援者だといえるかもしれません。被災者と支援者という２つの枠を、私たちは約９年の歳月をかけて、少しずつ乗り越え、交わり、仲間や家族のような関係となっていったのだと思います。

大震災、津波、原発事故によってコミュニティが破壊され、分断が進んでいく中、人間的なつながりによって、分断を一致の方向に変えていくことこそが、私たちの役割だと思います。今回の「教皇と被災者との集い」によって、皆が一堂に会し、それぞれの考え方や立場、被災者と支援者という枠も超えたところでひとつになり、一緒に祈ることができたことが大きな恵みです。この集いと祈りが、一致に向けたシンボル（しるし）として、これからの私たちの中に生き続けると思います。

今回教皇によって、歩むべき道、すなわち「一人一人を大切に、そして自然界を大切にする心に基づく道」が明確に示され、励まされた私たちは、これからも勇気をもって歩んでいきたいです。

ＣＴＶＣスタッフの皆さん（東京ドームにて）